写真で切り取る 多様な台湾

戦後、思想統制を経て民主化運動が進み、経済発展を遂げた台湾。そこで生まれた写真を集めた展覧会が、山梨と東京で開かれている。多様な文化をとらえたり、現代社会と自身の内面を写しだしたり、半世紀にわたる写真表現を追うことができる。

激動の時代 あらゆる場所へ　山梨

清里フォトアートミュージアム（山梨県北杜市）の「島の記憶」展は、1970～90年代の写真に焦点を当てた。11人が捉えた計152点が並ぶ。国連からの脱退や戒厳令の解除など、緊張感があった時代の中で、写真家はあらゆる場所に飛び込み、多様な社会のありようを浮かび上がらせている。

この時代の写真表現をリードした一人が張照堂（43年生まれ）。報道の仕事に携わりながら、写真を撮り続けた。海辺でまどろむ少年を捉えた「歳月の旅」は、慌ただしい時代にありながら、地方に残る郷愁を静かに感じさせる。

顔に入れ墨があるタイヤル族の長老たちを追った張詠捷（63年生まれ）の作品は、長老一人ひとりが真正面を向き、こちらを見つめている。こうした入れ墨があるタイヤル族はわずかで、貴重な記録だ。一方、林國彰（51年生まれ）は中国にルーツを持つ漢民族客家の暮らしを撮影。それぞれは別の国を撮影したかと思えるほど印象が異なり、多民族が生きる台湾社会を考えさせる。

ほかにも路上のデモ運動、平穏な街並みなどが並ぶ。山地裕子学芸員は「若かった写真家が、被写体に必死に向き合った。11人それぞれが切り取った点と点をつなぎ、この時代の台湾の全体像を知ることができる」と話す。

▽12月2日まで、火曜休館（11月20日は開館）。

自身の内面 客観的な視点で　東京

一方、東京芸術大学大学美術館陳列館の「台湾写真表現の今」展は、1960年代以降に生まれた写真家8人が、今の台湾社会や自身の内面を見つめて撮影した作品が紹介されている。

杜韻飛（75年生まれ）が手がけた「未来の先祖像」は、台湾人の父と東南アジアなどからの移民の母をもつ10代の若者を写した巨大なポートレートだ。民族衣装などルーツが分かる情報はそぎ落とした証明写真のような作品で、杜は「台湾人とは何だと見つめられないか、と考えた」と話す。

都市開発で区画整理された建物を撮影した楊欽盛（73年生まれ）の写真は、その断片が漢字の「田」のように見える。「時間さえ切り取られたかのように見える」と楊は話し、経済発展で生まれた風景の違和感に着目している。

台湾では80年代以降、経済発展で日本などへ芸術関係の留学が増え、出展作家のうち4人に留学経験があるという。企画を担当した同大の佐藤時啓教授は「海外で学び客観的な視点をもつことで、育った街の新たなおもしろさに気づけている」。87年に戒厳令が解除されて表現が広がったといい、「見えていない考えを写しだす写真表現が増えた」と話す。（森本未紀）

▽29日まで、無休。

張照堂「歳月の旅」（1990年）
©Chang Chao-Tang

林國彰「客家の出会い1995」（1995年）
©Lin Kuo-Chang

張詠捷「顔に刺青のあるタイヤル族の長老」（1992年）
©Chang Yung-Chieh

杜韻飛「鄭雅匀　嘉義市」。「未来の先祖像」から（2018年）

楊欽盛「台中市南屯區五權西路（CitySerection）」（2008年）

浮遊する空間で表す東京

梅沢和木 × TAKU OBATA

今の日本や東京のイメージを示したい――。東京・神宮前のワタリウム美術館で開かれている「超えてゆく風景展」は、そんな意図に基づく2人展。梅沢和木（1985年生まれ）とTAKU OBATA（80年生まれ）が対照的ながら響き合う表現を見せている。

メインの展示室の壁は、梅沢がネットで採集した画像を素材にした表現で埋め尽くされ、中央には、OBATAによる高さ2㍍を超える宇宙飛行士風の立体が立っている＝写真上。

梅沢はネットで見つけたアニメ的なキャラクターや風景の画像を集めてコラージュ状にし、ときに手描きの跡を加える。「余白を埋めたい」と話し、重力や身体感、物質性の欠落したネットから生まれつつ、密度と強度、大災害の跡の崩壊感も漂わせる。

OBATAの立体は実際は重たい木彫。近づけばノミ跡も残るが、そこにポップな造形とカラフルな色彩を加え、遠めからは樹脂製のような軽さに。ブレークダンサーでもあるOBATAらしい無重力感か。

OBATAの映像作品も出色だ。赤や黄色、緑のミニマルな直方体が宇宙遊泳するようなCGに見えるが、すべて実写で、本人は「特撮」と紹介。カラフルな木彫を白地の背景に放り投げ、その軌道に合わせてカメラを動かして撮影し、スロー再生したために浮遊感が生まれている＝写真下は「Takuspe buttai Abstract」（2018年）の一場面。

重力の無化や軽い身体を思わせる両者の作品。美術館の和多利浩一代表は「この空間に今の東京が表れている」。（編集委員・大西若人）

▽12月2日まで。10月8日を除く月曜休館。

海外通信　@モスクワ

江戸絵画名品展

奇想

今年は日ロ交
では日本関連イ
れている。中心
られているのが
ーシキン美術館
戸絵画名品展」
「鷹見泉石像」
重要文化財9点
が公開されてい
江戸時代の絵
に見られる、こ
展覧会はロシア
ア初公開で、国
ることが稀な作
者は「両国首脳
決定したお陰で
った展覧会を短
た」と語った。
なる状況にあっ
は常に日本美術
い。本展も、モ
の展覧会として
り、開幕から1
人以上が訪れる
展示は琳派や
に始まり、浮世
影響を受けた南